



つくる人に、未来をつくる力を。

文化芸術プロジェクトをつくり出すための“5つの力”、
気づく力・ビジョンを描く力・計画する力・つながりを生む力・運営する力を育成する唯一の場所。

ARTS PROJECT SCHOOL

ARTS PROJECT SCHOOLは“個”をつなぎ、“全体”に挑む5つの力を手に入れる創造的な場所

アーツプロジェクトは、まちや社会の歪んだバランスを創造的なプロジェクトでチューニングし、アップデートする文化プログラムといえます。また、「私(個)」と「まち(全体)」を創発的に刺激し、社会関係資本を構築し、革新的なクリエイティブプロセスを生み出すことでもあります。

まちや社会のバランスを考えるとき、また、アーツプロジェクトを動かすとき、「人間力(ビジョンを描く力)」「美感力(気づく力)」「しきみ力(計画する力)」「環境力(つながりを生む力)」「自律力(運営する力)」という、5つの力が価値基準になります。

今、自分がいる場所(全体)は、「人間力」「美感力」「しきみ力」「環境力」「自律力」のうち、何が欠けているのか? どうすればそれを補えるのか? その問いかけは、プロジェクトそのものをつくる人(個)にも「ビジョンを描く力」「気づく力」「計画する力」「つながりを生む力」「運営する力」として向けられます。

ARTS PROJECT SCHOOLでは、実践的にプロジェクトを学ぶプロセスのなかで、“個”や“全体”に欠けている力と向き合うことになります。そして、歪んだバランスを補うために“個”をつなぐチームをつくり、5つの力を補完しながら“全体”に挑んでいきます。

ARTS PROJECT SCHOOL 統括ディレクター
中村政人

アーツプロジェクト5つの価値基準

五角形の最小単位は「私(個)」や「プロジェクトチーム」。ただし、五角形のバランスは必ずしも均等ではなく、バランスはいびつになっている。その影響はまち(全体)や国、世界にも繋がるが、「私(個)」で均等なバランスを保つのは難しい。アーツプロジェクトは、相互のスキマを補完するように、互いのバランスを整えるプロセスを生み出し、“何か”が欠けているものを補う社会実験でもある。



ビジョンを描く力とは?

プロジェクトのはじまりであり、すべての価値基準になるもの

ARTS PROJECT SCHOOL ディレクター
中村政人(アーティスト)

“ビジョン”は未来を描く力。方向性を定め、構想を練りあげていく力とも言えます。そして「私(個)」と「まち(全体)」との関係性を示すものであり、プロジェクトに必要な「気づく力」「計画する力」「つながりを生む力」「運営する力」すべてに影響します。また、プロジェクトのはじまりであり、完成像でもあります。

自分の能力を感じながら、時間も場所も自由に行き来し、“個”と“全体”がつながるときにビジョンが生まれます。逆に、“個”と“全体”的関係性が不明確な状態では、ビジョンを描くことはできません。

また、より良きビジョンであるためには「純粋」「切実」「逸脱」の3つが必要です。これは「アート」を成立させる要素とも言えます。純粋になれる対象なのか? 切実にやりたいことなのか? 逸脱しているものなのか? を問わなくてはなりません。

ARTS PROJECT SCHOOLでは、“個”と“全体”的関係性を意識せざるを得ません。全体に対するリサーチと分析、マネジメントは、揺るぎないビジョンが核心的に共有されてこそ生き生きと動き出します。ビジョンを描き続けるトレーニングは、自分とまちの未来を描くことに重なります。



3331 Arts Chiyodaにはギャラリーやオフィスが入居し、文化的活動の拠点に



1999年、2000年、2002年に東京・秋葉原の電気街で開催された展覧会「秋葉原TV」

1963年秋田県大館市生まれ。アーティスト。3331 Arts Chiyoda統括ディレクター。東京藝術大学絵画科教授。1993年、銀座でのグリラ展「THE GINBURART」から多くのアートプロジェクトを企画・制作。1997年よりアーティストイニシアティブコマンドN主宰。富山県氷見市、秋田県大館市等、地域再生型アート・プロジェクトを多数展開。2010年よりアーティスト主導、民設民営のアートセンター「3331 Arts Chiyoda」を立ち上げ、現在UP TOKYOエリアでの「東京ビエンナーレ2020」を準備中。

気づく力とは?

“気づき”は一瞬のひらめきではなく継続することで成熟されるもの

ARTS PROJECT SCHOOL 講師
日比野克彦(アーティスト)

アーツプロジェクトとは、ひとりではなく、複数の自分以外の他者と交わりながら展開していくものが数多くあるかと思います。そのなかで多くの“気づき”が生まれ、それが枝葉となり、次のプロジェクトに展開していくこともあります。

“気づく”ことはひらめきではなく、時間がかかるもの。過去にさかのぼらないと自覚できません。プロジェクトにおいても、継続する覚悟がないと“気づき”は熟成されず、身につかず、なかなか自覚できません。

“気づき”的ポイントは3回あると思っています。1回目は気づいていることに“気づかない”ことのほうが多い。数日経ったあとにずっと引っかかっているもの、忘れないものがあることに、心が働くのが2回目。そして3回目は、自分の外に出して確かめたくなるとき。自分の考えを言葉にしたり、人に話そうとするとき、本当に見えてくるものがあると思います。

ARTS PROJECT SCHOOLが、あなたにとって、1回目の気づきの場になるか? 2回目の気づきの場になるか? それとも3回目かはスクールで出会う人次第ですね。互いに刺激しあえる場になることを楽しみにしています。



全国の明後日朝顔プロジェクト参加地域の関係者が一堂に集まる「明後日朝顔全国会議」



“違い”を超えた出会いで表現を生み出すアートプロジェクト「TURN」 撮影:伊藤友二(Courtesy of Arts Council Tokyo)

1958年岐阜市生まれ。東京藝術大学美術学部長、先端芸術表現科教授。岐阜県美術館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長、東京都芸術文化評議会専門委員、公益財団法人日本交通文化協会理事を務める。2003年よりスタートした朝顔の育成を通して、人と人・人と地域・地域と地域のコミュニケーションを促す「明後日朝顔プロジェクト」は16年目を迎え、現在29地域が参加している。



計画する力とは？

構造と形態を行き来する
思考のトレーニングから生まれるもの

— ARTS PROJECT SCHOOL 講師
山崎 亮(コミュニティデザイナー)



美感力(気づく力)や環境力(つながりを生む力)の高い、アート関係のプロジェクトを好む人たちは、“ビジネスモデル”を好みない傾向があるように思います。しかし、「こう感じたからやってみた」というものでは協力者を募るのが難しいし、経済的な持続性を担保しにくい。

アーツプロジェクトを実践するためには、社会にインパクトを与え、持続しているプロジェクトが持つ仕組みやモデルを常に頭の裏側で描きながら、さまざまな事例を学ぶ必要があります。面白いと思ったこと、うまくいっていると感じたものは、どんな構造で成立しているのか? 正解かどうかは問題ではなく、自分のなかで仮説(モデル)をつくり続けることが大切。それが一定数ストックされると、ようやく自分が取り組むプロジェクトのモデルを生み出せるようになります。

ただ、ビジネスモデルを重視しすぎると、アーツプロジェクトの力が失われてしまします。ビジネスモデルでは解決できないところに挑むことができるのがアーツプロジェクトなので、「やりたい!」と思うプロジェクトをビジネスモデル化することが重要だと思います。ARTS PROJECT SCHOOLでは、常に背後にある仕組みやモデルをイメージする訓練をしていきます。



日常生活の障壁をシェアし、解決策を考え実践する「OIMOROLIFE(オモロライフ)プロジェクト」@横浜市



“未来の暮らしを見に行こう!”をテーマに広島県内19自治体で実施した住民発案の博覧会イベント@広島県

1973年愛知県生まれ。studio-L代表。コミュニティデザイナー。社会福祉士。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

つながりを生む力とは？

すべての人や、予想外の出来事を
「ようこそ」と受け入れるマインド

— ARTS PROJECT SCHOOL 講師
田中元子(株式会社グランドレベル代表取締役社長/
建築コミュニケーター)

“つながり”は目的ではなく、手段であり、結果だと思います。「つながらなきゃいけない」「つながることがいいことだ」という、コミュニティのお花畠から脱しないと、本当のコミュニティは生まれない。昨今のコミュニティブームのようなものに対して「本当なの?」と、ぼんやりとでも本質的な問い合わせほしいと思います。なぜそれが必要なのか? ARTS PROJECT SCHOOLに参加する方々には、本当にそれを設計したり、仕込んだりすることはできるのか? ということに向き合ってもらいたいですね。

つながりを生むヒントになるものがあるとすれば、大阪のおばちゃんが鞆のなかから取り出す“アメちゃん”。あれは自分のためでも、特定の人のためでもなく、“今日会うかもしれない誰かのため”にアメを忍ばせているわけです。アメひとつで小さな公共性が生まれる。そこには予想外の出来事や、想定外の“誰か”を積極的に受け入れるマインドが大切なかもしれません。すべての人に対して「ようこそ」というものであること。そして予想外のことが起きることが、成功であり、結果的につながりを生むことになるのだと思います。



喫茶スペースの奥に、ランドリーやアイロン・ミシン等を備えた「まちの家事室」がある「喫茶ランドリー」



ワークショップを行いながら公開空地や公園の新しい活用方法として展開する「パーソナル屋台」

1975年茨城県生まれ。株式会社グランドレベル代表取締役、建築コミュニケーター。2004年、クリエイティブユニット「mosaki」を共同設立し、主に建築関係のメディアづくりを行う。2014年より、ダイレクトにまちや都市に関わるプロジェクトに重点をシフトさせ、都市の遊休地でキャンプを行う「アーバンキャンプ」や、個人がフリーで振る舞う「パーソナル屋台」ワークショップを全国に展開。2016年、「1階づくりはまちづくり」をモットーとした株式会社グランドレベルを設立。2018年、墨田区に「まちの家事室」付きの現代版喫茶店「喫茶ランドリー」をオープン。



運営する力とは？

試行錯誤するために必要な
「自律性」「立ち戻る礎」「誰のために」

——ARTS PROJECT SCHOOL 講師
遠山正道（株式会社スマイルズ代表取締役社長）

プロジェクトの運営には、自律性、立ち戻れる礎、そして“誰のためにやるのか？”を考える必要があります。立ち行かない現実にぶつかり、方針を変える勇気も大切ですが、正しい判断を下すためにも、これらが軸になります。

プロジェクトを自らさせるためには、ビジネスで当たり前のことときちんとやることが大切。また、実際に進めていくと、うまくいかないことのほうが多く「何のためにやっているのか？」と立ち戻る場面が何度もあります。地元の人やお客様など、環境も思惑も違う立場の人たちと関わるときに、“自分たちが何を大切にしているのか？”を自覚していないと、どんどんブレていきます。

個人的には“誰かのために”を掲げている話には懐疑的です。“誰かのために”と言うと、見返りが欲しくなるもの。それより、きちんと自分たちの理由を持ったほうが誠実な対応ができると思います。

私は、“アートはトリガー”だと思っています。今あるものを組み合わせたり、なぞったりするのではなく、アートをきっかけに仕組みや考え方そのものを更新し、世の中に打ち込む。ARTS PROJECT SCHOOLのみなさんにも、トリガーになるようなことを実践してほしいと思います。



“食べるスープの専門店”として1999年に一号店をオープンした「Soup Stock Tokyo」



「瀬戸内国際芸術祭2016」に出品したアート作品
「檸檬ホテル」は、1日1組の宿泊が可能



全国5カ所に広がる ARTS PROJECT SCHOOLの ネットワーク

ARTS PROJECT SCHOOLの拠点は全国に5ヶ所。東京・京都・新潟・福岡・熱海で独自のカリキュラムを組みながら、交流プログラムを通して受講生同士のネットワークもつないでいきます。



ARTS PROJECT
SCHOOL
@KYOTO

京都府が2016年から実施する、アーティストやクリエイターによる府内の各地域のリサーチを経て、滞在制作をするアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」と連携し、京都市内で短期集中講座を開催予定。また全国のARTS PROJECT SCHOOL生が一堂に会する合宿も実施予定。
【京都: Re-Search 2018】
<http://kyoto-research.com>



ARTS PROJECT
SCHOOL
@FUKUOKA

福岡・大名エリアにある官民連携のスタートアップ支援施設「Fukuoka Growth Next」と、“未来の雑居ビル”をコンセプトとする建物再生プロジェクト「紺屋2023」が協働し、大名エリアを中心としてスクーリングを実施予定。
【Fukuoka Growth Next】
<https://growth-next.com>
【紺屋2023】
<http://konya2023.travelers-project.info/>



ARTS PROJECT
SCHOOL
@NIIGATA

アーツカウンシル新潟や『水と土の芸術祭2018』の市民プロジェクトと連携し、アーツプロジェクトに関わる人材育成を図る。
【アーツカウンシル新潟】
<https://arts council-niigata.jp>
【水と土の芸術祭2018市民プロジェクト】
<http://2018.mizu-tsuchi.jp/citizen>



ARTS PROJECT
SCHOOL
@3331

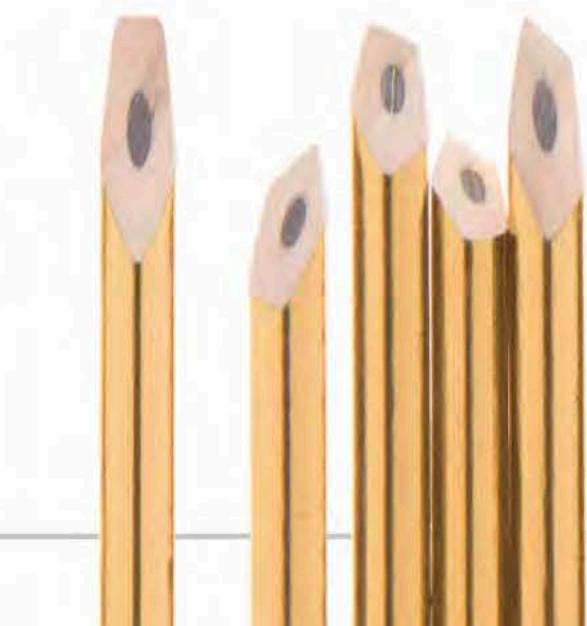
ARTS PROJECT SCHOOL全体の運営を(一社)コマンドNが実施。3331 Arts Chiyoda内で各講座(座学)の配信を全国のARTS PROJECT SCHOOLへ向けて行う。また全国の受講生が一堂に会するアーツプロジェクトサミットを2月に実施予定。

【コマンドN】
<http://www.commandn.net/>



ARTS PROJECT
SCHOOL
@ATAMI

「ATAMI ART FAIR 2020」開催に向け、NPO法人atamistaを中心として地方自治体や企業との連携のもと、atamistaの地域での起業と人材育成のノウハウも活用し、短期合宿形式でのARTS PROJECT SCHOOLを実施予定。
【atamista】
<http://atamista.com/>



7ヵ月でプロジェクト実現を目指す ARTS PROJECT SCHOOL @3331

東京・秋葉原にあるアートセンター「3331 Arts Chiyoda」が拠点となるARTS PROJECT SCHOOL @3331。さまざまなプロジェクトが日々動いているこの場所が、あなたのプロジェクトの出発点になります。



自分のプロジェクトを動かせる

講座(座学)だけでなく、演習やリサーチ合宿など、プロジェクトを実施するための実践的な機会が多く設けられています。企画段階からディレクターによる指導、実施後の成果報告会では、講師陣がプロ目線から批評やアドバイス。それらのフィードバックを受け、自分のプロジェクトをさらに磨くことができます。

地域と交流し、ネットワークを広げられる

地方都市で実施する合宿形式のリサーチプログラムは、全国のスクール生が一堂に会する機会です。そこに暮らす方々と向き合いながら、仲間と共にプロジェクトの企画・実践に必要なリサーチ力と、プロジェクトをかたちにするための立案力を身につけます。地域ネットワークを広げると同時に、全国のスクール生と繋がることができます。

3331 Arts Chiyodaとは?

旧練成中学校を利用して誕生した民設民営のアートセンター。地下1階、地上3階の館内にはアートギャラリー、オフィス、カフェなどが入居し、文化的活動の拠点として利用されています。

授業料実質無料で スタジオも24時間使用可能

ARTS PROJECT SCHOOL@3331では最初に「入学金」を頂きますが、これは受講生自身のプロジェクト費用とそのサポートのための各種経費に充当され、授業料は実質無料となります。さらに3331 Arts Chiyoda内のプロジェクトルームは「24時間APS生専用」の場所として使用可能。プロジェクト実施準備やMTGはもちろん、自由な使い方ができます。

ARTS PROJECT SCHOOL @3331 はスタイルで選べる2コース

プロジェクトのプラン立案から実施まで!

本科生

全カリキュラムの受講、グループプロジェクト、自身のプロジェクト実現も可能なコース。専用スタジオも24時間使用可能です。

- ・定員約20名の少人数制(審査による選考があります)
- ・入学金7万円で全カリキュラム受講+プロジェクト実施が可能
- ・地方合宿プログラムの交通費・宿泊費が無料(参加定員あり)
- ・専用スタジオを24時間使用可能(WiFi付き)

※本科生、レクチャーラーともに、審査により選考された方が受講できます。※本科修了生は翌年以降も専用スタジオを使用することができます。

働きながら&地方でも講座を受講できる!

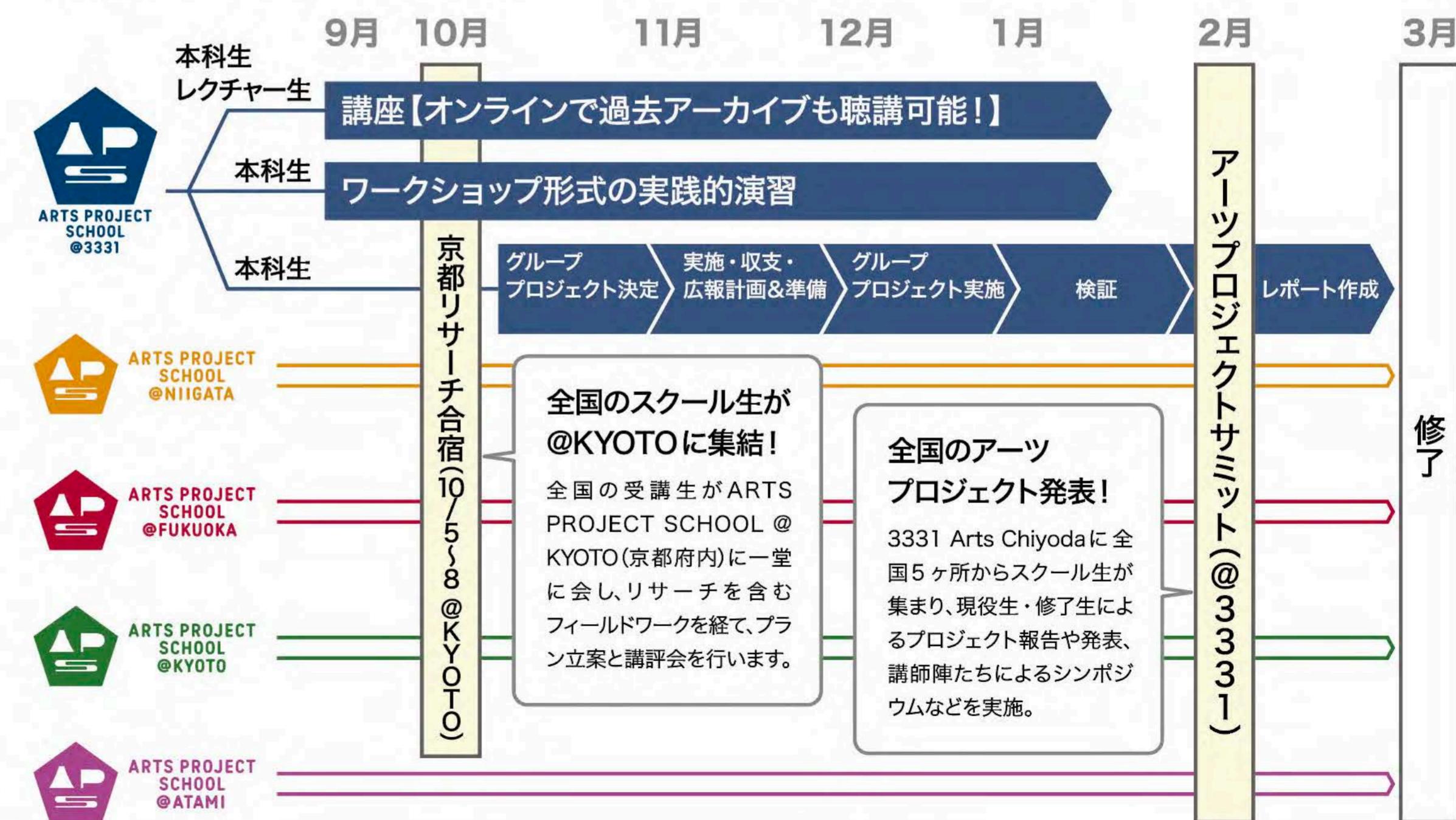
レクチャーラー

講座&実践プログラムのみ受講可能。講座はオンラインでアーカイブも視聴できるので、忙しい方や地方の方でも学べます。

- ・定員約10名、入学金&受講料0円(審査による選考があります)
- ・講座はオンラインでも受講でき、過去アーカイブも視聴可能
- ・希望すれば合宿やプロジェクト実施も可能(交通費や宿泊費等の実費は自己負担となります)

年間スケジュール

※各校の年間スケジュール詳細はARTS PROJECT SCHOOLのwebサイトにて随時公開



ARTS PROJECT SCHOOL @3331 の講師たち

アーティストやデザイナーから、経営者や弁護士まで。第一線で活躍し、現場を知るプロフェッショナルたちにプロジェクト実現のためのノウハウを学ぶことができます。

※2018年6月1日時点での講師陣となります。

小田嶋 Alex 太輔 Odajima Alex Taisuke (株式会社EDGEof 代表取締役 Co-CEO)

クラウドファンディングやICOといった新たな資金調達の手法を、芸術活動の資金調達としてどう活用するか。そして、芸術活動に事業性を持たせ継続性を高めるためにはどういった発想が必要となるかについて、お話がでければと思っています。



事業立ち上げに特化したコンサルタントとして、さまざまなスタートアップの設立や大企業の新規事業構築に携わる。共同代表を務めるEDGEofでは、クリエーターや起業家、研究者などが連携して事業創造に取り組み、イノベーションを加速するためのプラットフォームを展開している。

清水義次 Shimizu Yoshitsugu (都市・地域再生プロデューサー)

地域資源を組み合わせて課題解決するプロセスをチームでつくり出していく。まちで生活している人たちに敬意を払い、地元に溶け込み、動きながら考える。温かい心と志、ソロバンを併せ持つプロジェクトリーダーが生まれることを期待する。



3331 Arts Chiyoda代表、株式会社アフタヌーンソサエティ代表取締役。都市生活者の潜在意識の変化に根ざした都市・地域再生プロデュースを行う。なかでも現代版家守(やもり)業の実践と啓蒙に注力し、リノベーションまちづくりに取り組む。

池田晶紀 Ikeda Masanori (写真家)

写真の授業を担当させていただきます。
「いい写真」って、どういうことなんだろうか?
「伝わる写真」って、どう考えればいいのだろうか?
実用的なことを実戦する時間のなかで、むずかしくない問題解決を目指します。



1999年、自ら運営する「ブラックアウトスタジオ」で発表活動をはじめる。2003年よりポートレイト・シリーズ『休日の写真館』を制作・発表。2006年写真事務所「ゆかい」設立。2010年スタジオを馬喰町へ移転し、「ブラックアウトスタジオ」の名で運営を開始。

桶田大介 Okeda Daisuke (弁護士/牛鳴坂法律事務所)

法律や契約は「つながり」を整理して社会的に位置づけ、成果を糧に新たな創造を行うための手段。プロジェクトを立ち上げ、実行し、その成果から「つながり」を実現するにはどうすればよいか。法律や契約から「視点」や「気づき」のヒントをお伝えします。



2005年弁護士登録。2010年、ロンドン大学クイーン・マリーラ校LL.M終了。2008年より日本アニメーター・演出協会の活動にプロボノで参加。文化庁や経済産業省のアニメやマンガ関連事業に従事。立法や行政におけるアニメやマンガ等に関わる種々の取り組みに携わる。

塙本由晴 Tsukamoto Yoshiharu (建築家/アトリエ・ワン/東京工業大学大学院教授)

産業社会的連関に飲み込まれた私たちの暮らしは、産業や制度が下敷きにしている想定に慣らされ、それが許す範囲に条件づけられていないだろうか。そこに風穴を開けるべく、脱産業的な建築を考えることが今の私にとってはプロジェクトなのかもしれません。



1965年神奈川生まれ。貝島桃代と1992年にアトリエ・ワンの活動を始め、建築、公共空間、家具の設計、フィールドサーベイ、教育、美術展への出展、展覧会キュレーション、執筆など幅広い活動を展開。ふるまい学を提唱し、建築を産業の側から人々や地域に引き戻そうとしている。

遠山正道 Toyama Masamichi (株式会社スマイルズ代表取締役社長)

われわれスマイルズは「妄想と実業が得意です」なんて言っている。文化芸術に二本の足を生やして、どっしり両足で立つ。泣いたり笑ったり踊ったり、たまには小走りに逃げきったり。そんな人に私もなりたい。そんな人と友達になりたい。



2000年株式会社スマイルズを設立、代表取締役社長に就任。“生活価値の拡充”を企業理念に掲げ、現代の新しい生活の在り方を提案し、「Soup Stock Tokyo」「giraffe」「PASS THE BATON」「100本のスプーン」等を展開。

中村政人 Nakamura Masato (アーティスト)

与えられたことからはじめるばかりでは、依存する状況から逃れられない。予算がないからできないではなく、予算をつくるところからはじめる。環境をつくるところから始めればやれることが必ず見えてくる。



3331 Arts Chiyoda統括ディレクター。東京藝術大学絵画科教授。第49回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2002年)日本代表。1998年よりアーティストイニシアティブコマンドN主宰。2010年にアートセンター「3331 Arts Chiyoda」を立ち上げる。

加治屋健司 Kajiya Kenji (美術史家/東京大学大学院総合文化研究科准教授)

アートプロジェクトのさまざまな事例を取り上げながら、歴史的な文脈や言葉、そこから生まれた特徴や課題についてお話しします。プロジェクトを行う上で、歴史や言説とどのように関わればいいのか? 考えるための手助けになればと思います。



1971年生まれ。東京大学教養学部卒業。ニューヨーク大学大学院美術研究所博士課程修了。PhD(美術史)。日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ代表。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』(東京大学出版会、近刊)などがある。

佐藤直樹 Sato Naoki (グラフィックデザイナー/デザインディレクター/絵画制作)

今はデザインが大きく変化するタイミングですが、これからの時代に即したデザインの運動はまだ明確な姿を現していません。ARTS PROJECT SCHOOLはこれからの社会のための実験場となり、新しい価値観とデザインの指標を示すべきでしょう。



1998年、アジール・デザイン(現アジール)設立。2003~10年「セントラリーストート東京(CET)」プロデュース。2010年「3331 Arts Chiyoda」立ち上げに参画。サンフランシスコ近代美術館パーマネントコレクションほか国内外で受賞多数。美学校講師。多摩美術大学教授。

日比野克彦 Hibino Katsuhiko (アーティスト/東京藝術大学教授)

“私”という個人と“他者”との関係性から制作の動機が生まれ、私的な行為に他者からの共感が生まれていく先に、プロジェクトに変容するものもある。最初から“プロジェクト”ではじまることは少なく、個人での制作が根本にあるという意識があります。



1982年日本グラフィック展大賞受賞。平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)。現在、東京藝術大学美術学部長、先端芸術表現科教授。岐阜県美術館長、日本サークル協会社会貢献委員会委員長、東京都芸術文化評議会専門委員、公益財団法人日本交通文化協会理事を務める。

福住 廉 Fukuzumi Ren (美術評論家)

アーツプロジェクトを評価するための言葉は残念ながら成熟していない。アーツプロジェクトが「地域」を舞台にしている一方、これまでの批評言語は依然として「アート」にとどまっているからです。アーツプロジェクトに相応しい新しい批評言語とは? 実践的に考えましょう。



著書に『今日の限界芸術』(BankART 1929)他多数。『共同通信』で毎月展評を連載する一方、『今日の限界芸術百選』(まつだい「農舞台」/ 2015)など展覧会キュレーションも手がける。東京藝術大学大学院、女子美術大学、多摩美術大学、横浜市立大学非常勤講師。

山出淳也 Yamaide Jun'ya (NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事/アーティスト)

地域で継続的に活動を続けていくためには、ビジョンを持ち、どのように地域が変わっていくのかを考え、変化を起こすことが大切。必要となるのは物事を俯瞰して見る力、つなげていく力、継続させていく力。未来へのようすに活動を紡いでいくか。共に考えましょう!



2005年BEPPU PROJECT設立。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2009~15)、「in BEPPU」(2016~)等、文化を軸に地域性を活かした活動を展開。平成20年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞(芸術振興部門)、文化庁文化政策部会文化審議会委員。

清水義次 Shimizu Yoshitsugu (都市・地域再生プロデューサー)

地域資源を組み合わせて課題解決するプロセスをチームでつくり出していく。まちで生活している人たちに敬意を払い、地元に溶け込み、動きながら考える。温かい心と志、ソロバンを併せ持つプロジェクトリーダーが生まれることを期待する。



3331 Arts Chiyoda代表、株式会社アフタヌーンソサエティ代表取締役。都市生活者の潜在意識の変化に根ざした都市・地域再生プロデュースを行う。なかでも現代版家守(やもり)業の実践と啓蒙に注力し、リノベーションまちづくりに取り組む。

紫牟田伸子 Shimuta Nobuko (編集家/プロジェクトエディター/デザインプロデューサー)

まちは人々がつくるものだ。その地域ならではの文化的価値は人の中に残っていくものだから、今、そしてこれから行うプロジェクトが、次世代の地域文化を形成するきっかけになるはずだ。人の心にデリバリーできるプロジェクトについて考えてみたい。



美術出版社、日本デザインセンターを経て、2011年に独立。2016年に「1階づくりはまちづくり」をモットーとした株式会社グランドレベルを設立。2018年、墨田区に現代版喫茶店「喫茶ランドリー」をオープン。主な著書に『シックエコノミー: 私たちが小さな経済を生み出す方法』(フィルムアート社)など多数。

田中元子 Tanaka Motoko (株式会社グランドレベル代表取締役社長/建築コミュニケーター)

人とのつながりは、魔法でも絶対善でもありません。ただ、それによって広がる可能性は計り知れません。つながりを紡ぐためには、自分に何ができるだろうか? 楽しみながら、悩みながら、一緒に探していくましょう。



2004年、クリエイティブユニット「mosaki」を共同設立。2016年に「1階づくりはまちづくり」をモットーとした株式会社グランドレベルを設立。2018年、墨田区に現代版喫茶店「喫茶ランドリー」をオープン。主な著書に『マイパブリックとグランドレベル—今日からはじめるまちづくり』(晶文社)など。

山内真理 Yamauchi Mari (公認会計士/税理士)

プロジェクトを仕掛け、育むということは関係性のなかで責任を引き受けていることでもあります。会計はプロジェクトの経済的アーケイブを提供し、課題を可視化し、未来への地図を具現化するもの。プロジェクトを推進する道具としての会計の使い方や各種制度について考察します。



公認会計士山内真理事務所代表。有限責任監査法人トーマツにて法定監査やIPO支援等に従事した後、2011年にアートやカルチャーを専門領域とする会計事務所を設立。共著に『クリエイターの渡世術 20組が語るやりたいの叶え方』(ワークスコーポレーション)など。

山崎亮 Yamazaki Ryo (コミュニティデザイナー)

興味深い地域づくりが進むエリアには初期段階でアーティストが関わっている。そして、こうしたプロジェクトが進展する際に、アーティストと地域の住民や産業がうまく協働している。今回の講座は、アートとコミュニティと産業のうまい協働を実践的に学べる場になるだろう。



studio-L代表。コミュニティデザイナー。社会福祉士。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。著書に『ふるさとを元気にする仕事』(ちくまプリマー新書)など。

鷲田めるろ Washida Meruro (キュレーター)

誰が誰に向けてプロジェクトを行なうのか。「地域」とはどの範囲を指すのか。「伝統」のオーセンティシティは誰が決めるのか。一見自明のようでいて、プロジェクトを進めていくと、わからなくなってくるこうした問題について考えたい。



1999年から2018年3月まで金沢21世紀美術館キュレーター。「あいちトリエンナーレ 2019」、「瀬戸内国際芸術祭 2019」アーティスト選考アドバイザリーボード委員。的・芸術中心(北京)学術委員。金沢大学、金沢美術工芸大学非常勤講師。

講座と実践で学ぶ

ARTS PROJECT SCHOOL @3331

カリキュラム

講座からワークショップ形式の演習、現場を体験する実践や合宿まで、充実のプログラムで「ビジョンを描く力」「気づく力」「計画する力」「つながりを生む力」「運営する力」を手に入れるべく、多角的にプロジェクトを学びます。

※カリキュラム情報は2018年6月1日現在のものです。実際のカリキュラムに変更がある可能性があります。

基本からプロセス、運営まで学べる

講座プログラム



※本科生、レクチャーともにオンライン受講も可能

※過去アーカイブも視聴可能

アーツプロジェクト史概論

—アーツプロジェクトの歴史を紐解く—

講師 加治屋健司

(美術史家／東京大学大学院総合文化研究科准教授)

過去のアーツプロジェクトを多角的に読み解きながら、歴史的な文脈や言葉、そこから生まれた特徴や課題について学んでいく。また過去の事例を知ることで、プロジェクトを実施する上での歴史や言説との関係性を考察していく。

アーツプロジェクトの批評について

—これからのアーツプロジェクトを語るために—

講師 福住 廉

(美術評論家)

いまだ未成熟なアーツプロジェクトを評価するための言葉について、制度や歴史を踏まえながら実践的に考察していく。これからのアーツプロジェクトにふさわしい新しい批評言語とは?自分(他者)のアーツプロジェクトを批評し、評価するための知見を養う。

アーツプロジェクト概論

—個と全体の創発性をつくり出す5つの力—

講師 中村政人

(アーティスト)

“アーツ”という創造性を武器に、“プロジェクト”という戦略をいかに生み出すことができるのか?そのためには、私(個)に5つの力を与え、まち(全体)に挑まなくてはならない。では、いかにしてその5つの力を獲得できるのか?事例を踏まえ議論する。

芸術祭のディレクション／経営／運営

—地方における芸術祭の在り方とその持続性—

講師 山出淳也

(NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事／アーティスト)

10年以上、アーティストや地域の人々と協働し、別府のまち等を舞台にアートプロジェクトを展開してきたNPO法人 BEPPU PROJECTを例に、持続可能なアートプロジェクトのこれからの中の在り方や、運営体制の仕組みづくりについて考える。

地域の文化的価値に関する考察

—次世代へ向けた地域文化形成について—

講師 紫牟田伸子

(編集家／プロジェクトエディター／デザインプロデューサー)

文化や芸術は、ある土地やまちの人々のなかに、いかにして固有な文化的価値を形成するのか。東京の論理ではない、地方の、その土地ならではの次世代の地域文化を形成するプロジェクトについて、さまざまな事例をもとに考えていく。

アーツプロジェクトの批評について

—これからのアーツプロジェクトを語るために—

講師 福住 廉

(美術評論家)

いまだ未成熟なアーツプロジェクトを評価するための言葉について、制度や歴史を踏まえながら実践的に考察していく。これからのアーツプロジェクトにふさわしい新しい批評言語とは?自分(他者)のアーツプロジェクトを批評し、評価するための知見を養う。

地域文化とアートのキュレーション

—美術館の内と外をつなぐ事例から学ぶ—

講師 鷲田めるる

(キュレーター)

地域とアートの関わりの事例をもとに、美術館のなかだけでなく地域で行われるアートとそこに暮らす人々の未来の形を探る。金沢21世紀美術館に立ち上げから携わり、地域に向かう企画を展開してきた経験から、その課題を整理する。

コミュニティデザインの実践例

—地域づくりの具体例とプロセスから学ぶ—

講師 山崎 亮

(コミュニティデザイナー)

地方都市や海外のさまざまな事例や、自身が携わってきたプロジェクト例などから、コミュニティデザインのモデルや実践例、方法などを学んでいく。また実際にディスカッションやワークショップなどを通じた学びも予定している。

プロジェクトのふるまい学

—ふるまいから生まれるプロジェクト—

講師 塚本由晴

(建築家／アトリエ・ワン／東京工業大学大学院教授)

自然、人、建築の“ふるまい”的観察を通して、地域文化を読み解く「ふるまい学」を実践的に学ぶ。そこからプロジェクトを構想することが、現代の暮らしについての考察となり、同時に、それを見直すきっかけとなる。





プロジェクトにおける会計 —価値あるプロジェクトを推進するために—

講師 山内真理
(公認会計士／税理士)

プロジェクトを健全に育んでいくために、プロジェクトの課題を可視化し、未来への推進力を与える道具でありコミュニケーションツールである「会計」についての概論や活用方法、さらにはプロジェクトを取り巻く制度についても学ぶ。

法律や権利について —アート／ソーシャル・プロジェクトと法律—

講師 桶田大介
(弁護士／牛鳴坂法律事務所)

法律や契約と付き合い、社会におけるプロジェクトの位置付けを明確にする。商標を活用してプロジェクトを守る。新たな創造の手段として、社会的な“つながり”を整理し、プロジェクトを推進する方法のイロハを学ぶ。

ワークショップ形式で実践する 演習プログラム

※本科生のみ受講可能
※配信なし、現場参加(都内)でのみ受講可能

思考の流れを可視化するためのドローイング —“ビジョンを描く力”をトレーニングする—

講師 中村政人
(アーティスト)

環境的、身体的刺激を感じ取りながら思考を促し手から支持体へとの意識を解放させていく。絵を描くのではなく、目と手は、床や壁と連続している事を意識し、ビジョンを感じ取り、可視化させるためのトレーニングを行う。

現場を体験し、プロジェクトにいかす 実践プログラム

※本科生、レクチャーラーともに受講可能
※動画配信なし、現場参加(都内)でのみ受講可能

美術と教育を考える大写生大会@上野公園 —自分とは違う視点で“気づき”を得る—

講師 日比野克彦
(アーティスト／東京藝術大学教授)

子どもたちを対象とした写生ワークショップ(ドローイング等)に、フェシリテーターとして運営に関わる。プログラムを通じて自分とは違う視点の存在を意識することで、自身のアーツプロジェクトにおける多様な「気づき」を得るための実践とする。

デザインとはどういった術なのか —機能と文化と経済から考えるデザインの実践—

講師 佐藤直樹
(グラフィックデザイナー／デザインディレクター／絵画制作)

昨今よく耳にする「問題解決のためのデザイン」。しかし、現実にそんな特効薬のような事例は滅多にない。デザインは一部の好事家のたしなみなのか? 資金が豊富なプロジェクトに特有の手段なのか? 実践と結びつけ、“今”と“これから”に必要な「デザイン」を学ぶ。

会う力と写真と編集 —写真と編集をセットで考える—

講師 池田晶紀
(写真家)

はじめて会話したり、歩いたり、好きなモノを知ったりと、演習内でペアになったふたりだけの時間で感じ取った、相手のいいところを写真にして公開。他者によってつくられた“自分への見方”と“自分の見方”両方を共有し、楽しみながら自己確認する。

なぜ『東京ビエンナーレ2020』を開催するのか? —“ビジョン”と“計画”—

講師 中村政人
(アーティスト)

1970年「人間と物質」というテーマで開催された伝説的『東京ビエンナーレ』。50年後の現在『東京ビエンナーレ2020』が民間主導で計画されている。3331 Arts Chiyodaで開催中の同展企画プレゼン会場にて、本プロジェクトについてディレクター中村政人が全貌を語る。

喫茶ランドリー —まちに開かれた場の創出例—

講師 田中元子
(株式会社グランドレベル代表取締役社長／建築コミュニケーター)

墨田区で営まれている“まちのみんなで利用する家事室がついた喫茶店”「喫茶ランドリー」。そこでは、あまねく人々の「やりたいこと」を応援する場が日々育まれている。「コミュニティ」や「つながり」の本質とは何か、実際に現場を体感しながら議論する。

東京を飛び出し、地域の現場で学ぶ 合宿プログラム

※本科生のみ受講可能
※レクチャーラーは交通費や宿泊費等の実費自己負担で参加可能

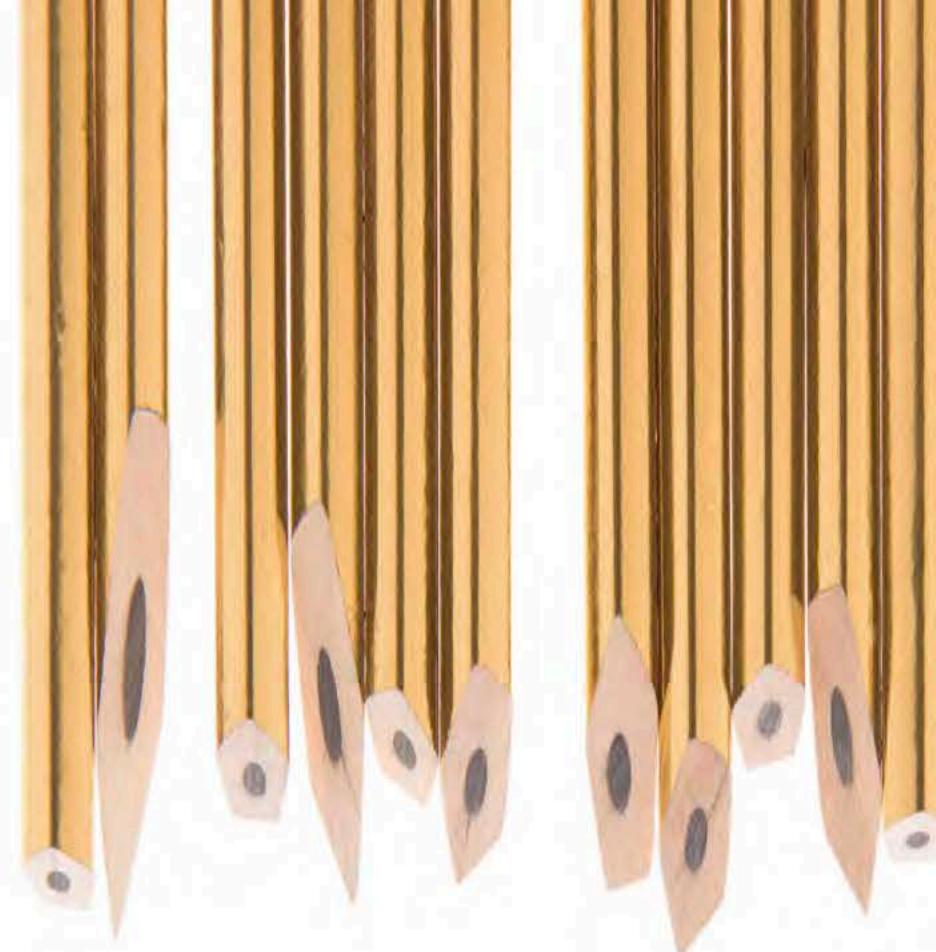
地域リサーチ合宿@京都 —地域資源をリサーチし立案までを実践する—

日程 10月5日(金)～8日(月) **場所** 京都市内、福知山市内

京都市内と福知山市内で地域リサーチ合宿を実施。全国のスクール生が集い、京都市内・福知山市内いずれかでリサーチからプロジェクト立案・プレゼン・講評を行う。京都府が実施するアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』と連携。

ARTS PROJECT SCHOOL @3331 PROJECT ARCHIVE

2018年で3期目を迎える「ARTS PROJECT SCHOOL @3331」(2018年より「Project School @3331」から改称)。昨年のスクール生はどんなプロジェクトを実施したのか? 修了生はその後どのような活動を行っているのか? その一部を紹介します。



2017年度(2期生)実施プロジェクト

“閉じられた”都会の屋上を“開く” 東京アルプスプロジェクト

「東京アルプス」member
宿野部隆之、中野 敦、本郷寛和

“屋上のカッコイイ、キモチイイ、タノシイをみんなの日常にする”をミッションに、屋上を利用することをプロジェクト。ビルオーナーへの交渉を経て、屋上での撮影会やイベントを実施。スクール修了後もプロジェクト継続中。



“音”でコミュニケーションするwebアプリを開発 NE:オトノミチ

「NE: OTONOMICHI」member
大澤裕之、高地 寛、那須大功、吉倉千尋

場所や言語を越え、“音”でコミュニケーションを促すべく、世界中の人々を繋ぐサウンド系SNSを制作するプロジェクト。リサーチ、音の収集、そしてwebアプリとオンラインコミュニティを開発し、プロモーションイベントも実施。



伝統技術を次の世代へ伝える・繋げる みんなのかみすき

「わしごみ TOKYO」member
宇佐美和彦、河原功也、
朽久保佳代、和氣明子

次の世代に手漉き和紙の魅力を伝え、繋げるプロジェクト。山形県で月山和紙を取り扱い、webサイトで記事を掲載したほか、手漉き和紙を身近に感じられるワークショップなどのイベントも開催。



あてもない“時間”について考えてみる あてもなく研究所

「あてもなく研究所」member
山本尚毅、小出真吾、田中美帆

ギリシャ時代に2種類に分かれていた「時間」の概念について認知と理解を深めるプロジェクト。さまざまな分野の学者やクリエイターに取材し、ZINEを発行したほか、「時間」をテーマにしたイベントやトークセッションを実施。



2016年度(1期生)修了後の活動



他分野とのコラボレーション企画を精力的に実施



東京都大田区京浜島で2017年に開催されたクリエイティブフェス『鉄工島FES』参加企画をキュレーションするほか、自主運営するオルタナティブスペース「spiid」にて『SUMIDA ART BOOK MARKET』を開催。

青木 梓(インディペンデントキュレーター)



合唱の楽しさを子どもたちに伝えるべく団体を発足



合唱の楽しさを次世代の子どもたちに伝えるべく、合唱振興団体「歌学実験室」を2017年5月に設立。デジタルアートや工作など、さまざまな分野とコラボレーションしながらワークショップを開催。

田中 葵(デジタルアート制作会社、歌学実験室 主宰)



子ども映像制作ワークショップを事業化



子ども映像制作ワークショップ運営のため株式会社こどもシネマを設立。非営利事業として「こどもシネマフェス★キッズディレクターになろう!」(2017年/IID世田谷ものづくり学校など、映像ワークショップを展開)。

大竹 晓(映像ディレクター／株式会社こどもシネマ代表取締役)



秋田を拠点に自治体や企業と連携したプロジェクトを展開



森吉山麓ゲストハウス「ORIYAMAKE」リノベーション設計、秋田内陸縦貫鉄道地域活性化企画「夢列車プロジェクト」、町コン企画「きたあきたから」企画制作など、秋田を拠点に数々のプロジェクトに携わる。

柳原まどか(コマド意匠設計室代表／デザイナー)

ARTS PROJECT SCHOOL

主催：文化庁

一般社団法人非営利芸術活動団体 コマンドN



ARTS PROJECT SCHOOL booklet

発行：ARTS PROJECT SCHOOL 事務局(コマンドN)

デザイン：鈴木真梧

編集：小西七重

撮影：池田晶紀(ゆかい) [cover(P01),P03,P05,P09,P18]/

ただ(ゆかい) [P04,P06,P07]

ロゴマーク：佐藤直樹

コピー：服部昭彦(Smile Switch.Inc)

»応募申込はコチラまで

<https://artsprojectschool.jp/>

平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業

「全国に文化芸術プログラムを作り出すアーツプロジェクトリーダー育成事業」

ARTS PROJECT SCHOOL@3331 / ARTS PROJECT SCHOOL 事務局

東京都千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 210

TEL : 03-3518-9101

お問合せ : info@artsprojectschool.jp

